



GEIBUN GALLERY



平成19年4月にオープンした駅地下芸文ギャラリーは3年目を迎えました。今年は新たなスタッフも加わりこれまでの企画展示の充実を図ると共に、芸文ギャラリーが主体的にコーディネートを行った展覧会を開催しました。主な企画展を紹介します。

駅地下芸文ギャラリー 羽田 純

地域連携プロジェクト 駅地下芸文ギャラリー

2010年中のピックアップ企画

「それゆけ、図工女子！」

～ガーリークラフトと、イマドキ文具の展覧会編～

日 時 | 2010年8月27日(金) / 9月6日(月)
主 催 | 富山大学芸術文化学部

本展覧会は芸文ギャラリーが召集した4名の女性作家を組み合わせ、個展や通常のグループ展では出し得ない魅力を創出しようと試みた企画です。

出品者を女子のみにしぼり、それを全面に出した多ジャンルな作品展にするという企画に挑戦するにあたり、そもそもの「ガーリー」を象徴する定義を探るため何名かの女子に相談したところ、もう、正直やめときゃよかったと途中で思うくらいに毎回、企画者の男目線をことごとく否定されました。しかしそんな中でうっすら見えてきたのは、どうやらそれ(ガーリー)は確固たるアイコンであるにもかかわらずどんな定義にもアクティブに馴染み、なのにどの枠組みにも縛られない、もしかして全てはただのアイコンでしかないんじゃないかということ。

冒頭で書いたように本展覧会では芸文ギャラリーが選んだ県内外で活躍する4名の作家を集めました。普段の活動拠点が違う彼女たちは作品のタイプも素材も全く異なる性格を持っています。先に述べておかなければならないのは、本展覧会の趣旨は決してこの4名の作品もしくはキャラクター性を組み合わせることにより、一つの女子像を浮かび上がらせ、それを『芸ギャラのガーリー』と提案するものではないということです。

むしろ今回テーマを深く探っていく中で一つわかったのは、一括りにできるイメージ通りのガーリー像の生成など不可能かつ無意味であり、繋がりそうで繋がることの無いバラバラな不完全要素こそが、逆に受け手側が感じるそれぞれの『ガーリー』という印象にあるイメージを際立たせ、おもしろくさせるのです。キムチ好きな森ガールだっているということです(森ガールという言葉はデリケートで非常にシビアであるという話は散々聞きました!)。とにかく何か一つ取り上げて「ディス、イズ、ガーリー!」と定義することは難しい、というかその定義自体に絶対性を求めることすら意味が無かったのです。しかし、定義こそ無いものの、ガーリーという言葉が持つイメージや期待感には確かに相当な質量をもちながら存在し、世界規模で様々なカルチャーを生み出す原動力になっていることは確かです。

そして改めて我々は、そんな決してまとまりきることのない彼女らがもつ強烈なキャラクター性を作品展として発信する軸足(武器)を決めるため、タイトルを『それゆけ、図工女子!』と名付けました。イメージが良い方向に一人歩きし、かつ妙な誤解を生成しない非常に破壊力のある、何より芸ギャラっぽいテーマになりました。

ハイセンスで丁寧な仕事をしながら、背伸びを感じさせず等身大の「いまここです」を的確に作り出す現代っ子女子4名による展覧会。ショップコーナーにて、富山の雑貨ショップや東京のデザイン会社などに協力していただき同時開催で行われた文具フェアにも、非常に多くの来場者が足を運びました。



▲カラフルな上履きには様々な趣向を凝らした刺繍がほどこされている



▲展示風景



▲展示風景

2010年 企画展示一覧

- 1/8 ~ 18 ・さんになんてん
- 1/23 ~ 30 ・第49回富山県デザイン展ワークショップ
「職人的デザイン」成果作品展示会
- 2/5 ~ 15 ・45の木のおもちゃ
- 2/19 ~ 3/1 ・現代GP「出会い・試し・気づき・つなぐ芸術
文化教育 - ものに語らせる連鎖型創造授業 -」
平成21年度後学期コラボ授業成果展
- 3/6 ~ 14 ・あんな色あんない
- 3/19 ~ 29 ・贈る時計の展覧会
- 3/20 ~ 21 ・富山アートマーケット出展
- 4/2 ~ 5 ・MONY ZAKHOUR EXHIBITION
- 4/9 ~ 12 ・芸文プライズコレクション 2010
- 4/16 ~ 27 ・水野行偉ケンチュウ展 2010
- 4/30 ~ 5/10 ・雑貨屋 Tommy Dining vol.5
- 5/14 ~ 24 ・Gift14
- 6/4 ~ 8 ・芸ギャラスタッフ展 ~羽田純 編~
- 6/11 ~ 16 ・芸ギャラスタッフ展 ~蓮野典子 編~
- 6/19 ~ 20 ・ミラ・フォトエキシビジョン
- 6/25 ~ 7/5 ・はじめての立体造形展
- 7/8 ~ 13 ・Eco Friendly Action 展
~身近にできるエコの提案~ 2010
- 7/23 ~ 27 ・芸文オープンキャンパス連携
特別展覧会
- 8/2 ~ 8 ・ヤルキッズアート道場 2010
~夏休みこども教室~
- 8/13 ~ 22 ・ヤルキッズアート道場
~夏休みこども展覧会~
- 8/27 ~ 9/6 ・それゆけ、図工女子! ~ガーリークラフトと、
イマドキ文具の展覧会 編~
- 8/27 ~ 9/20 ・駅地下芸文ギャラリーのデザイン文具と
ステーションナリーフェア
- 9/8 ~ 20 ・芸文堂 2週間だけ本屋さん
~建築・インテリアデザインの洋書フェア~
- 9/17 ~ 28 ・タカチカフラッグアワード展
- 10/1 ~ 10 ・PLY
- 10/8 ~ 18 ・おやつの森と、ゆかいな森の
なかまたち展
- 10/20 ~ 26 ・妄想玉手箱ジオラマワークショップ
- 11/12 ~ 23 ・似顔絵師 CH2.3 個展
『CH2.3 は RAKUGAKI ☆』
- 12/10 ~ 14 ・3angle. トライアングル~ 3つの視展~
- 12/17 ~ 28 ・雑貨屋 Tommy Dining vol.6

詳細は WEB に掲載
<http://geibungallery.jp>





「ヤルキッズアート道場 2010

～ あっ飛び出すいんちき立体アルバムだ!の巻～

▼ワークショップ（制作）について

日 時 | 8月2日（月）～8月8日（日）

A. 午前の部…9:00～12:00 B. 午後の部…13:00～16:00

（※5日（木）除く/各回定員6名）

場 所 | 駅地下芸文ギャラリー

▼制作内容について

作 品 | 家族との思い出写真（コピー可）を立体的にコラージュして、
空想のへんてこ立体アルバムをつくろう。

対 象 | 小学生（学年により、作品の難易度が変わります）

持ち物 | はさみ、筆記用具、思い出写真

（いくつでも可。風景の写真が多い方が楽しい）

講 師 | 羽田純（デザイナー・美術作家）/ 蓮野典子（現代美術作家）



▲展示風景：ボックスの横にのぞき穴がある

駅地下芸文ギャラリーの夏休み子供教室、題して「ヤルキッズアート道場」も、おかげさまで、なんとか今年で3回目を迎えました！今回のお題は、家族でお出かけた思い出写真や旅行パンフレットなどを小さな箱の中にコラージュ。できあがったジオラマは、箱の側面の小さな穴から覗くと、驚くような迫力と不思議な世界観を持つものとなりました。

例年のように資源ゴミで何かしらの生き物をつくるという単純なものではない分、できあがった作品一つ一つが持つストーリー性はグンと高くなりましたが難易度も同時に上がり、参加者だけでなくスタッフや今回のために特別に手伝ってくれた学生、作家さん、親御さんたちも必死でした……。

ヤルキッズの目標は、ものづくりの面白さを知ってもらうことではなく、『劇的な初体験』をすることにこそあるのですが、初めて見る素材や画材、考えたことの無かった鑑賞方法など、今回も至るところに仕掛けた初体験を感じとり、こどもたちの中に残ることを願いながら、にぎやかに幕を閉じました。



▲展示風景：穴からのぞくと箱の中につくったジオラマの世界が広がる



▲ワークショップ風景



▲「芸文プライズコレクション2010」



▲「さんになてん」

「芸文プライズコレクション2010」

会 期 | 2010年4月9日(金) - 4月12日(月)
主 催 | 富山大学芸術文化学部・駅地下芸文ギャラリー

2010年3月、高岡市美術館で開催された「GEIBUN 1 - 富山大学芸術文化学部第1回卒業制作展 -」から、特に評価を受けた卒業生(※下記参照)たちの全作品からいくつかを再展示。展覧会鑑賞者の主な対象は春から新入学した学生たち。新入生のほとんどは県外生のため、入学前に先輩たちの卒業制作を目にすることがありません。それゆえこの時期のこのような展覧会は、新入生にとって『これからの4年間の目標』になるようにと企画しております。

「さんになてん」

会 期 | 2010年1月8日(金) - 1月18日(月)
主 催 | 旧富山大学高岡短期大学部 OB

旧富山大学高岡短期大学部OBの内藤ゆかり、上田祐章子、石垣妙による3人展が開催されました。同大学で木材工芸や金属工芸を学んでいた三人が、卒業後東京や新潟、神戸と別々の場所で暮らしながら少しずつ制作してきたレーザークラフト・写真やボックスアートなど、それぞれの「現在」を作品として展示しました。

作品はもちろん、展覧会のレイアウトにも非常に気を配っており、来場されたお客さまからも非常に沢山の支持をいただけていました。このように当大学を巣立ったOBが今回のように「その後」の発表の場また集まる場所となれたことを嬉しく思いました。